プロジェクト

自由に生きるための学び

鈴木雄紀

本プロジェクトでは、「自由に生きるための学びとは何か」という問いを軸に、教職員が対話を重ねながら自由の意味と教育実践への接続を探求した。2025 年度は、自由の概念の検討、創立者の思想や人権・福祉の視点からの考察、自治や評価への展開という三つの段階を通して議論を深めた。自由を、自分自身を形成し他者と協働しながら探求し続ける営みとして捉え、自由を育む教育の可能性を検討した。

1. 活動概要

「自由に生きるための学びプロジェクト」では、「自由に生きるための学びとは何か」という問いを出発点として活動を開始した。メンバーは、五十嵐司（中等部）、大畑方人（高等部）、鈴木雄紀（高等部）、藤清人（広報本部）、室永優子（最高学部）の 5 名である。目に見える成果物や結論を急ぐのではなく、プロジェクトメンバーそれぞれが教育現場で抱く問いや違和感を持ち寄り、一人ひとりの言葉に丁寧に耳を傾けながら、「自由とはどのようなものか」「自由はどのように育まれるのか」を、対話を通して考え続けることを重視した。

2025 年度の活動は、振り返れば大きく三つのフェーズとして整理することができる。第一のフェーズでは、自由の概念を探求するとともに、学園の現状を見つめた。第二のフェーズでは、創立者である羽仁夫妻の思想や、人権・福祉の視点から自由を捉え直した。第三のフェーズでは、これらの議論を教育実践へ接続することを試みた。

このように 2025 年度は、「自由」という理念を探求することから始まり、その理念を教育思想や教育実践へと往還しながら、一年間を通して探求を深めた。

2. 各フェーズでの活動内容

①自由の概念を探求し、学園の現状を見つめる（5〜7 月）

活動の序盤では、「自由」という概念そのものを探求することを主な目的とした。「自由」と一言で言っても、その言葉から思い浮かべるものは人によってさまざまである。そこで、「自由とは何か」という根本的な問いについて対話を重ね、それぞれの考えを持ち寄りながら、自由という概念の輪郭を描いていった。メンバー自身の教育現場での経験に加え、羽仁もと子「教育の目的とその方法」、川原栄峰『哲学入門以前』をはじめ、哲学・教育・対話に関する複数の文献を手掛かりに対話を深めた。

対話の中では、「自由には選択肢が必要であること」「外的束縛だけでなく、欲望や感情などの内的束縛からも自由になる必要があること」「自由は他者との関係の中で初めて成立すること」など、多様な視点が提示され、一つの定義に収束させるのではなく、それぞれの経験や教育実践と結び付けながら理解を深めていった。

また、教職員アンケートを実施し、「自由学園で自由が育まれていると感じる場面」と「自由が阻害されていると感じる場面」について意見を集めた。その結果、主体的な学びや教員と生徒の人格的な関係、挑戦を認める文化などが自由を支えている一方で、評価への過度な意識、対話不足、「自由学園らしさ」の固定化などが自由を阻害する要因として挙げられた。アンケート結果をもとに、自由を教育実践の中でどのように実現するかという問いが生まれ、その後の活動へとつながっていった。

②創立者の思想や人権・福祉の視点から、自由をより深く捉え直す（9 月〜1 月）

中盤では、自由学園が創立以来大切にしてきた「自由」の理念を学ぶとともに、自由を教育思想や人権の観点から再考した。

自由学園資料室・村上民を招いた回では、羽仁もと子・羽仁吉一が語る「自由」について学び、創立当初から自由学園が掲げてきた自由の理念や、その背景にある思想に

ついて理解を深めた。創立者が自らの心にある願いや欲望に本気で向き合い、試行錯誤を通じて成長していくこと、すなわち欲望の教育を大切にしていたことから、自由とは、自分のうちにある願いを育てながら、自分自身を作り上げる営みであるという考えが共有された。

また、創立者が自らも生徒であり、素人として日々進歩するものであり続けようとした姿勢に触れ、自由とは完成された正解ではなく、生涯にわたって問い続け、歩み続ける「探求の道程」そのものであるという視点を得た。

さらに、自由学園スクールソーシャルワーカー・入海英里子から、福祉の視点から人権と教育の在り方について話を聞き、「その子がその子として育つこと」を教育の目的とするという視点から、現在の学校の仕組みや教育実践を改めて問い直した。「同じ大きさや形の『実』を育てることを目指し、できの悪いものを間引くようなこれまでの教育」を問い直し、「個が本来持っている育つ力を信じ、環境を整えていく」という福祉・人権の視座を共有した。委員選挙や教科における評価など、日常の教育活動の中にある価値判断や選別の構造について問い直し、「自由」と「人権」を切り離すことのできないテーマであることを再認識するとともに、教育における価値判断や評価の在り方そのものを問い直す契機となった。

③評価・自治など具体的な教育実践へ接続し、自由を育む教育を考える（11 月～2 月）

活動の終盤では、「自由×自治」「自由×評価」という視点から、「自由に生きるための学び」の教育現場での実践の在り方を考えた。

自治については、自治を単なる役割分担や運営の仕組みとしてではなく、一人ひとりが共同体の運営に主体的に参加し、他者と協働しながら学校や社会を形づくっていく営みとして捉え直した。また、対話こそが自治を支える基盤ではないかという視点が共有された。

評価については、評定や学校生活における評価が、生徒の学びや自由にどのような影響を与えているのかを議論した。評定や数値による評価が学びに与える影響や、自己評価・他者評価の役割、評価と評定の違いなど、多様な視点から意見を交わした。その中で、評価そのものを否定するのではなく、「評価は何のために行うのか」「誰のための評価なのか」といった評価の目的や在り方そのものを問い直し、「格付け」としての評価から、「理解的態度に基づく対話（フィードバック）」としての評価への転換を模索した。

本年度の議論を基盤として、具体的な教育実践への展開については、2026 年度も継続して検討していく予定である。

3. まとめ

本年度の活動では、「自由とは何か」という問いに一つの答えを与えることを目的とはせず、対話を通して問い続けることそのものを大切にしてきた。その過程で、自由とは、自分のうちにある願いを育てながら自分自身を作り上げ、他者との対話や協働を通してともによりよく生き、生涯にわたって探求し続ける営みとして捉えられるようになった。

また、メンバーからは、「自由の捉え方が広がった」「抽象的な議論が自治や評価、人権といった具体的な教育実践へと結び付いていった」「異なる立場の教職員との対話そのものが自由に学ぶ経験となった」といった振り返りがなされた。活動の後半には、現場で生じている具体的な課題が議論の出発点となり、プロジェクトで生まれた問いが各部の実践や制度の見直しへと還元され始める動きも見られた。

本年度は、「自由」を抽象的な理念として論じるだけではなく、人権、自治、評価といった具体的な教育課題へ接続する土台を築くことができた。2026 年度は、この一年間の対話の蓄積を基盤としながら、「自由に生きるための学び」を教育実践の中で具体化するとともに、現場の課題と往還しながら探求を継続していきたい。